

いま頃、静恵はどうしているだろうか。そして佑介は……。

風のうわさに、佑介は凜子と別れた一年後に、同級生と結ばれたと聞いた。

しあわせであってほしいと思つた。または、その逆であつてもいいと考えている自分に気づき、凜子は小さく唇を噛んだ。

凜子は再び訪れた場所で、自分のなかに住む悪魔を消すために、夜空を見上げ、胸いっぱい息を吸いこんだ。

そろそろ部屋に戻らないと貫太が心配しているかもしれない、と思つているのだが、凜子の頭の中は佑介との思い出が占め、それを追い出すことができずにいた。

あの日。

佑介の実家を訪れた初日の夕方、早々と自分のために二人の女たちが布団を敷いてくれた、その直後だった。

佑介はドライブに行こうと言つて、凜子を街へ連れ出した。数十分車を走らせ、賑やかな街のど真ん中にある駐車場に車をすべりこませる。

連れていかれたのは、靴屋、衣料品店、生鮮食品店、居酒屋などが軒を連ねる、どこか昭和の匂いのする商店街だった。

二人は、商店が左右に並ぶ細い通りをゆつくりと歩きだした。はじめての場所なのに、凧子は遠い昔に、このあたりを訪れたことがあるような錯覚を覚えた。

ひしめき合って並ぶ店のひとつひとつに個性があり、各々が静かに主張している商店街は、面積は小さいが、都会にあるものはそれなりに何でもそろっている、香川そのものの姿に思えた。

キリンだったか、カンガルーだったか、動物の名前がついていたことだけは克明に覚えている。しかしいまでは、商店の並ぶその通りの名前すら、凧子は思い出すことができない。

通りを南に向かって歩いていくと、やがてアーケードは切れ、傘のない通りが凧子と佑介の視界に入った。

二人に強い光が射したように感じた、そのときだった。

「結婚しよう」

レストランでもなく、夜景が美しいどこかの丘の上でもなく、彼はふるさとの、動物の名のついた通りで、凧子の耳元に囁いた。

不思議だった。喜びもなければ、不安もなかった。こうなるだろうと思っていた通りのことが起こった。筋書き通りじゃないか。

凧子の感想はそんなものだった。

「ええ、いいけど」

「それだけ？」

もつと喜んでくれると思った、と佑介は、アーケードの外の世界をちらりと見て言った。そして、君らしいけどね、とつつけんどんに言い添えた。

何度も機会はあったのに、もつとふさわしい時期もあつたのに、自分のふるさとでプロポーズをするとところが、佑介らしい。

この時点で、結婚をしても、わたしはあなたのこどもが産めないかもしれないの、と佑介に告げたら、彼はなんと答えただろうか。どんな反応をしたらだろうか。

恵まれた家庭に育ち、正しく生きてきた彼に、また道を外れることをなによりも恐れている彼に、<sup>3</sup>

凜子は自分たちの未来を壊すようなことを口にする勇気がなかった。

いま自分が宿泊しているホテルからあの商店街へは、歩いて行ける距離なのだろうか。

ふと凜子は、五年ぶりに動物の名前がついた通りを歩いてみたいという衝動に駆られた。

「星がきれいだね。東京の空とはぜんぜんちがう」

驚いて振り返ると、貫太がいた。

彼はお尻のポケットに手を突っ込み、顎がちぎれそうなくらいに首を反らせ、夜空を見上げている。

佑介ならこんなとき、どう言うだろう。

星がきれいだね、とは言わず「いつまで外にいるの。風邪をひくぞ」と叱り、凜子の腕を引いて、中へ連れ戻したにちがいない。

双方のやさしさをわたしは知っている、と凜子は思う。両方を比べて点数をつけられないことも知っている。しかし、自分の気持ちに線を引かなければ前に進めないこともまた、凜子は痛いほど

にわかつていた。

貫太の目は、薄明かりの中で輝いていた。

「迎えにきたよ。もう部屋に戻ろう」

「うん」

ふたりの間に、沈黙が訪れた。それを破ろうと凜子は貫太に尋ねた。

「高松にはね、動物の名前がついた商店街があるらしいの。ガイドブックには載っていないなかった？」

「さあ。気がつかなかったな」

さきほどよりも、周りが静かになったような気がした。凜子の頬を撫でる風は優しく、額に散らした髪をそろりと動かした。

「明日、気が向かないのなら、別に出かけなくてもいいさ。君次第だよ」

歌うように貫太がぼつりと言う。観光名所を巡るだけが旅じゃないさ、と満面に笑みを浮かべて、つけ加える。

彼なりの気遣いだった。

「わたしは、こんびらさんに行きたいな」

「無理しなくていいよ」

貫太は笑みを浮かべて、ぽんと凧子の肩を叩いた。

翌日、ふたりはこんぴらさんを訪れた。

本宮にたどり着き、お参りをすませたあと、奥社まで足を伸ばすことにした。

本宮までは七八五段、奥社までは一三六八段の石段がある参道を、一步一步進んでいく。

「なぜ本宮までの石段の数が、七八五段なのかわかる？」

途中、貫太は自分の知っていることを披露するときの誇らしげな顔を、凧子に向けた。

「さあ」

「七八六、ナヤムの一步手前だからさ。悩む前にやめておく。だから七八五段」

「へえ」

凧子は、貫太を喜ばせようと、目を大きく見開き、大げさに驚いて見せた。

石段をのぼりきり、頂上にある巖魂神社でお参りをすませると、ふたりは大きな息をひとつつき、ベンチにばたんと腰をおろした。

「だいじょうぶ？」

凜子は小さくうなずく。

貫太は、凜子の体調だけを気遣って声をかけたのではない。旅の初日から、いつもとはちがいでどこか落ち込んでいるように見える凜子の変化に、彼はうすうす気づいているのだ。

凜子は貫太に心の内を気づかれまいと、からつとした笑みを返し、彼の肩に自分の頭をそつと預けた。

「こんなにたくさん石段があるなんて思わなかった」

二度目なのに、まるで初めて訪れたときのような感想を、凜子は述べてみた。

心の中で「嘘つき」と叫び、凜子は自らの頬を指で軽く引っ搔いた。

さらに、もたれかかった男の胸の鼓動を感じながら、他のひとのことを想っていた。

「いよいよ明日だね」

「なにが？」

「友だち。久々に会う友だちだよ」

凜子は脈がさらに速く打つのを感じた。

ああ、とだけ答えて、貫太から離れ、ベンチを立ちあがって景色を見下ろせる場所まで移動する。貫太もあとにつづいた。

「おお、橋が見える。ほら、ぼくらが渡ってきた橋だよ。瀬戸大橋って、ここからこんなにはつきり見えるのか」

貫太に、明日のことを言われてから、彼の話すことばなど、頭に入らなかつた。

目の前に拡がるのどかな風景が、佑介と過ぎした過去を震わせ、涙を誘った。凜子はこのとき、貫太のそばにいながら、瞼の裏では、貫太の知らない自分だけの景色を眺めていた。

おんな友だちではなく、会いに行くのは過去の恋人なの、とはつきりと貫太に告げたら彼はなんと答えるだろうか。きつとなに食わぬ顔をして、行つてらっしゃい、と凜子を送り出すにちがいない。

わたしはただ、彼が住んでいる町を少し散歩するだけなの、と凜子は自分に言い聞かせた。彼の人生の邪魔をするのでもなければ、復縁を願っているのでもない。ひと目、うしろ姿でも見られればそれでいい。

一瞬でも、あの広く、がっちりとした背中が見られたならば、わたしは過去の出来事をすべてよき思い出にし、気持ちを切り替えるつもりでいるの。だってわたしはもうすぐ東京で、ウエディングベルを鳴らすのだから。

言い聞かせば言い聞かせるほどに、切なさや虚しさや、凜子の胸に押し寄せた。

(以上6月13日放送分)